

はしがき

21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」の研究報告集シリーズ第8集にあたる本書は「ユーラシア国境政治：ロシア・中国・中央アジア」というタイトルで編まれた。本書に掲げた表題に込められた意味は、従来、北東アジア、中央アジア、南アジアなどエリアごとに区切られて論じられることの多かった地域に関わる国際政治問題を、ユーラシア全体のダイナミズムにおいて、少し広い視野でとらえてみたいという問題意識である。またエリア間の、あるいはエリアに属する諸国間のダイナミズムがもっとも表現される地点が「国境」ではないかという思いから、特にそう表現を加えた。

本報告書の冒頭では、2004年12月12日、科研基盤研究(B)「ポスト冷戦時代のロシア・中国関係とそのアジア諸地域への影響」の研究活動の一環として開催された、中央アジアをめぐる座談会の模様を収録した。「最新情勢」と銘打った座談会だが、昨年末に開催されたため、アカエフ大統領退任を引き起こしたクルグズスタン(キルギス)の騒擾、さらにはウズベキスタンのアンディジャン事件など中央アジアをめぐる事態の急変には到底、追いつけてはいない。にもかかわらず、この座談会で示された情勢認識や情報は今後の中央アジアの動向を議論するための基本的な前提や長期的な視座を提供していると思われる。従って、近々の情報を期待する読者は裏切られることになるが、逆にこの座談会の延長線上に最新の情報を載せ、自らの想像力を働かせて、中央アジア及びその周辺地域の国際政治の行方を読み解いてほしい。

座談会では言及が少なかった地域の情報を補い、また、あまり日本に馴染みがない国を紹介したいという意味で収録されたのが、メフラリ・トシムハンマドフの「タジキスタン内戦と戦後復興」である。現在、在タジキスタン日本大使館の政治アドバイザーを務めるトシムハンマドフは、かつて国連タジキスタン監視団(UNMOT)調査員として故秋野豊政務官とも一緒に仕事をしていた。いわばタジキスタン内戦の生き証人ともいえる彼の論文は、2004年6月7日にスラブ研究センターで開催されたCOE主催セミナーで報告され、D. クリフツォフと加藤美保子が翻訳した。

岩下明裕の2本の論考は、ユーラシアにおける「国境」の意味を考えるために収録された。「中国と中央アジア：接触地域の現場検証」は最近5年間の国境調査の記録であると同時に、中国と中央アジアの相互依存の深化を様々なデータから明らかにしようとする。

「中・ロ国境問題の最終決着に関する覚え書」は前稿「中・ロ国境問題はいかにして解決されたのか？」(『法政研究』第71巻4号)の補論であり、世界を驚愕させた2004年10月のロシアと中国の国境問題完全解決の舞台裏についての更なる追跡である。ポスト冷戦下のユーラシア全体を包摂する国際政治システムの形成について力説するのは、いささか時期尚早であるが、ユーラシアを舞台とした「新地域形成」の芽生えを多少なりとも描くことができているならば、編者として幸いである。

なお、報告書の原稿及び訳文などの点検については、多くの方の手を煩わせた。スラブ研究センターの宇山智彦氏にはその専門地域と言語に関する深い造詣で原稿の数多くを、荒井幸康氏にはモンゴル語にかかわる部分をご指導いただいた。伊藤薫氏には地図の作成・写真の加工で特にお世話になり、COE支援室の伊藤恵理、細野弥恵両氏には図表の作成、原稿全体の校正およびレイアウトをお手伝いいただいた。記してお礼申し上げたい。もとより、これらは編者及び執筆者の責任を免ずるものではない。

2005年6月10日
北海道大学スラブ研究センター
岩下 明裕